ナグサアキラメルフェン

ひのかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナグサアキラメルフェン

【Ｎコード】
Ｎ９４６５Ｑ

【作者名】
ひのかさ

【あらすじ】
「どうせ無駄だから」――私はそんななぐさめが嫌いじゃなくて、煙くんはそんなあきらめが嫌いじゃなくて、だけどスウ先輩だけは大嫌いだった。幽霊相手にお節介をしても待っているのはむなしさだけ。それなのにスウ先輩は性懲りもなく、既に死したひとびととかかわりつづける。
幽霊が見える高校生三人組の日常。掌編連作。

30．桜の花びらのシャワー

私たち三人が出会ったのは、それはそれはありきたりなことだけれど、春、桜の咲くころだった。

その場所を通りかかったのはたまたまだった。滅多に通らない校舎裏を通ったのは、ほんとうに偶然足が向いたからで、別段用があったわけでもない。そこそこ広いその場所には、大きな切り株が一つだけあって、そのほかはなにもないことを私は知っていた。そう、なにもないのだ――いつもなら。

はじめ、それを紋白蝶かと思った。あまりにも情緒豊かに宙を舞っていたから。生きているみたいにひるがえり、弧を描いてわたしの目の前を通り過ぎていったそれは、しかし蝶ではなく桜の花弁だった。花弁の来た先を、ここには桜の木なんてないのに、といぶかしみながらも辿る。

するとそこに、純白の花の群れをそこかしこに纏った、それは大きな桜の大樹が見えた。背の高い校舎の陰は薄暗いのに、その中にあってなお、花の白さや輝きは少しも侵されていない。花々は砂糖菓子かなにかのように可憐で、それでいて地に足着いた高潔な力強さがあった。まるでその木が魔性を秘めているみたいに、一度見たらもう視線を外せない。吸い寄せられる。

開いた口がふさがらないとはこのことだ、と思い、実際無様に口を開け放しにしていた私は、頭のすみっこで思う。

これは尋常のことではないぞ、と。

「……おばけ桜」

実際、そう呟いたわたしの直感は正しかった。

「お前、見えてる？」

ふいにそう声をかけられて、肩が跳ねた。ぎょっとして声の主を

探すと、くすんだ色の校舎の壁際に、男子生徒を見つけた。毛足の長い頭に着崩した制服、何より三白眼が目立つそのひとは、座り込んで、私のことを見ていた。

それがスウ先輩だった。

スウ先輩は見た目よりもずっと人懐っこい人で、初対面の私相手にも昔からの友だちみたいに話をした。

曰く、この桜は幽霊なのだそうだ。生前、彼女はそれはそれは立派な桜の大樹だったのだが、校舎の増築などの関係で伐採されることになった。しかし彼女は、自分を見て楽しんでくれた人々のことが忘れられず、こうして春の短い間、生前と変わらぬ姿で――いや、もっと美しい姿で化けて出る。

「だから毎年、この時期には花見に来る」

こいつが成仏できるようにな、そう言って先輩は薄く笑った。先輩のまわりを見ると、なるほど、お猪口と徳利が――。

「未成年が、いいんですか？」

「馬鹿、校内で酒飲むか。形だけだよ、中身はサイダーだ」

先輩が徳利の中身を注ぐ。言ったとおり、透明な液体が白い陶器の中ではじける。しゅわ、とかすかな音が耳に届いた。

そのときふいに思った。この人は、ちょうどこの飲み物と似ている、と。一見不良っぽいけれど親しみやすくて、それからまとう空気がすうっと透んで清い人だったから。

じっとお猪口の中ではじける泡を見ていると、スウ先輩は言った。

「飲むか？」

物欲しそうに見えただろうか。別に飲みたかったわけではないのだけれど、その旨を伝えるより早く、先輩は地面に置かれた余分なお猪口にサイダーを注ぎ始めた。先輩が飲んでいたぶんと、私の分であろうひとつと、それからなぜかもうひとつ。　不思議そうな視線に気づいてか、先輩が言う。

「ああ、もう一人来る約束なんだ」

そのもう一人が、煙くんだった。煙くんもやっぱり、ほんとうに

偶然にここを訪れ、炭酸飲料を飲んだくれていた先輩に花見仲間にさせられたのだ。
花見仲間。そう、はじめは花見仲間だった。
後でやって来た煙くんと私を見回し、スウ先輩はいかにも年長者といった笑顔を浮かべて言ったのだ。
「よし、これであと二年は安泰だ」
幽霊がだれにでも見えるご時勢ではないから、今年で卒業の先輩は気に病んでいたのだという。来年からはもうここに来れなくなることを。花見をする人間がいなくなることを。
私と煙くんは顔を見合わせた。煙くんも私と同じで、来年も花見をするの？　なんて思っていたことだろう。けれど笑っている先輩と、どこか嬉しそうに枝を風にそよがせ、花弁の雨を頭上に振らせる桜の木を前にしていたから、なにもいえなかった。
結局のところ、私たち三人の間柄は花見仲間に留まらなかったのだけれど、そのときは、私も煙くんも困惑していた。

私にとって――たぶん、煙くんも同じだろうと思う。ちゃんと聞いたことはないけれど――私にとって、幽霊は見えていても看過するものだった。というか、看過せざるをえなかった。だって、見えるだけで、触れることも成仏させることもできないから。どんなに彼らを助けたいと願ったとしてもそれはかなうわけはないから、はじめから願うことさえしなかった。私はただ、既に死したものたちを傍観するのみの人間だった。そこには「どうせ無理なんだから」というあきらめがあったし、なぐさめがあった。
けれどスウ先輩は、違った。
先輩は公然と言ってのけたのだ。俺はどちらも大嫌いだ、と。
先輩とて、私たちと変わらず見えるだけの人間だった。それでも、彼はいつでも彼自身の成しえることを成そうとしていた。私が傍観者なら彼は主人公だったのだ。

出会ったのは本当に偶然だった。運命と呼べば大袈裟にすぎる、ちっぽけな出会い。

けれどそんな出会いでも、あきらめとなぐさめが好きな私たちを変えたかもしれない。そんな気がしている。

スウ先輩が卒業してゆき、私と煙くんが一年ずつ進級した今。私たちは薄暗い校舎の陰で、お猪口とサイダーのミスマッチを受け継ぎ、花見をしている。おばけ桜は変わらず美しく、私たちの頭上に桜の雨を降らす。私はその雨を受けながら、考えずにはいられない。新入生にこれが見える子はいるだろうか、見つかるだろうか、一緒に花見をしてくれるだろうか、と。そんな自分を自分で笑う。やはりすっかり影響されている。煙くんはなにも言わないが、私が呼ばなくても自分でここに来たし、今も熱心に桜に見入っているからまんざらでもなさそうだ。

お猪口を傾ける。

口の中で、炭酸がほのかな刺激を残して消えた。

３０．桜の花びらのシャワー（後書き）

書くにあたりお題をお借りしています。
群青三メートル手前（ｈｔｔｐ：／／ｕｚｕ．ｅｇｏｉｓｍ．ｊｐ／ａｚｕｒｉｔｅ／）さまより、淡々五十題

０４．　立入禁止テープ切断

煙くんの話をしよう。

煙くんは、私とスウ先輩の後輩の男の子だ。高校一年生。

煙くんというのは、私がつけた勝手なあだ名――記号とも言う――で、心中でそう呼んでいるにすぎない。彼にはきちんと親につけてもらったであろう本名があり、呼ぶときはそちらで呼ぶ。ただ、彼は私にとっては煙くんなのである。

彼は高いところが好きだ。けれど、馬鹿ではない。

だから消去法で、煙。

私たち三人が、なんとなく、スウ先輩を中心に集まるようになったとき。

「こうして教室にいると、視線が痛いよな」

先輩が言った。たしかに、一年の男子と二年の女子と三年の男子、それも客観的に見て接点がありそうもない三人だ。一同に介していると、教室に居残る人たちの視線を集めてしまうのも頷ける。かといってこうして集まるのは学校公認の部活動というわけでもないから――あたりまえだ。私たちの接点を考えれば――部室としてどこか確保できるわけでもない。となると後は屋外か学校外なのだが、屋外でたむろしているのも品がないし、学校外でするほど必要性がある集まりというわけでもない。

そんな中途半端な私たちの接点とはなにか。

ふいに、三人の視線が宙のある一点に集まった。なんくれとなくこちらを気にしていた生徒の一人も、つられて宙を見る。けれど彼は数瞬そうした後、小首を傾げてもとの姿勢に戻る。

煙くんがぼそっと、ごく小さな声で呟いた。

「……よく出ますね」

「三年校舎は古いからな」
応じる先輩の声も低く抑えられていた。
私も見ていた。今、私たちの頭上を通り過ぎていった、ぼんやりした半透明の色のかたまりを。
私たちの接点。それはつまり、三人ともこうして幽霊を見るということだった。
「やっぱり落ち着かないな」
先輩が唸る。
私も思う。こんなことばかり繰り返していたら、妙な三人組として噂になりかねない。妙な、と噂をたてられるのは平穏無事な学校生活を望む私には不都合だ。スウ先輩と煙くんと知り合いであるのを知られたくないわけではないけれど、いかんせん。私の口からも唸り声が漏れる。
そうして二人して唸っていたら、突然煙くんが立ち上がった。
先輩と私が目を丸くして煙くんを見ると、彼は無言で手招きした。

煙くんが自分からなにかをすることは、めずらしいと言ってよかった。煙くんは無口で、あまり感情を表に出さない。そして、たいていの場合スウ先輩や私の後ろを歩いていた。
そんな彼が、私たちを先導して歩く。歩いて歩いて、特別教室が集まる別館まで来た。階段を登る。登る、登る。
屋上につながる階段には、鎖が渡してあり、プラスチックのプレートが立ち入り禁止の旨を告げていた。
煙くんはほんの一瞬たちどまったけれど、あとはためらいなく鎖をまたいで階段を登る。先輩と私も顔を見合わせながら鎖を越えていく。
屋上に出る扉が見えた。重そうな扉だった。煙くんは埃っぽい踊り場を横切り、扉の前に立つ。そして学生ズボンのポケットに手を差し入れた。
ちゃり、という軽い音と共に表れたのは、キーホルダーも何もつ

いていない、そっけない銀の鍵だった。
「お前、それまさか」
一見不良みたいな強面のわりに真面目なスウ先輩は、たじろいだような声をだした。
煙くんは鍵を滑らかな動作で差し入れ、回した。がちゃりと重い音がした。
「その鍵、どうしたんだよ」
開いてしまったということは、言わずもがな屋上に出る鍵なのだ。先輩は一転して呆れた声を出した。煙くんがぼそっと答える。
「……合鍵です」
なんでまた、と先輩が聞くより早く、扉を押し開けて煙くんが出て行く。
後に続くと、まっすぐな風が髪を巻き上げた。思いのほか広々とした空が、薄茜に染まっている。高台にある学校だから、眼下に町の景色が臨めた。何の変哲もない雑然とした町の様子だったけれど、すかんと遠くまで突き抜ける視界には解放感があった。
「雨の日とか、冬はどうしようもないけど」
ぽつり、と煙くんがつぶやく。見ると煙くんは、フェンスにもたれかかって一心に景色を眺めている。夕日を受けて赤く染まる頬に、かすかな憧憬を含んだまなざしに、感じるものがあった。
「屋上が好きなの？」
おずおずと、私は口に出した。
ふつう、合鍵なんて作らないから。よほどのことがないかぎり。
煙くんはしばらく沈黙した後、こくりと頷きを返した。
「高いところが、好きなんです」
あまりにも言葉少なだったけれど、それが彼の常だった。
スウ先輩は腕組みをしてなにやら考えていた。それからまるで漫画でするみたいに、ぽん、と手を打った。
「ここ、お前のお気に入りだったけど俺たち三人の場所にしようぜってこと？」

煙くんは答えなかった。けれど、先ほどの煙くんの言葉がなによりの答えだった。
先輩はたちまち満面の笑みになった。アスファルトの地面を蹴って小走りに煙くんに近づくと、いきなり頭を撫で回し始める。ぐりぐり、という擬音がぴったりな勢いで。
「はは、俺嬉しいわ。さんきゅーな」
嬉々とした声と共に、煙くんの短い髪を右に左にかき混ぜる。
「わっ、え、や、やめっ」
煙くんは目を皿にしてたじろぐ。先輩の腕から逃れようともがいたけれど、力が足りないのかうまくいかないようだ。先輩は腕をくぐりぬけようとする後輩をやすやすと捕まえては惜しみない愛情を注いでいる。
「きっ、清見先輩っ、止めてくださいよ…！」
煙くんが私に懇願する目を向けている。少し涙目だった。
私は薄く笑って、二人に歩み寄る。
「もう、先輩」
煙くんの瞳に、安堵がはしり――
「ずるいじゃないですか、一人だけ」
――一瞬で消失した。
「ちょっと、先輩、や、やめてくださ」
暖かくなった心のお礼に、私はスウ先輩と一緒に、煙くんを撫で回した。

そうして、この町でいちばん高いその場所が、私たちの居場所になった。

煙くんは高いところを愛する。けれど馬鹿ではない。意志は秘め隠すものであることを知っており、そして、意志あるものの前に禁止の二文字は意味をなさないこともまた知っているから。

４４．　君に、預ける

スウ先輩はばかだ。

放課後、雑貨屋に寄り道した。学校のすぐそばにあるその店は、いつのぞいてもたいてい同じ学校の女の子がいる。

ころころというドアベルの音を聞きながら店内の様子を目に映す。と同時に、わたしは目が丸くなるのを感じた。

白ゴマの中の黒ゴマのごとく、思いもしないひとがそこにいた。

その人というのは、スウ先輩のことだった。よりによって、スウ先輩だった。

これが煙くんであったなら少しは場に溶け込めたと思う。彼は女の子みたいに細くて小さくて小動物然としたところがある。ではスウ先輩ではどうだろう。真逆である。先輩は中身は真面目で善人だが、外見は不良だ。研ぎ澄まされた三白眼で雑貨を凝視するそのさまは、まるでちぐはぐで恐ろしささえ覚える。

先輩、いったいなにをしているんですか。こんな女子の牙城で、彼女のひとりも連れず野郎ひとりで。

そう心の中だけで呼びかける。店内の女性客から怪訝な目を向けられている先輩に堂々と声をかける勇気は、わたしにはなかった。

ところが。

それまで微動だにせずうつむいていたスウ先輩が、すっと顔を上げた。そしてどういうわけか、引き寄せられるようにわたしを見た。

「清見」

つぶやくような声だったが、名前を呼ばれてしまった。

これではもう逃げられない。

わたしはあきらめ混じりにひとつ息をついて、先輩に歩み寄る。

「なにしてるんですか、こんなところで」

先輩は、助かった、というような顔をした。

キーホルダーを探しているのだと、先輩は言った。
「……第一校舎一階階段裏の男子便所の住人に頼まれてな。知ってるわけないと思うけど」
「……ああ、そういうこと。知るわけないでしょう、そんな場所にトイレがあることすら知りませんでした」
なにしろ男子トイレだ。たとえ知っていたとしても入る機会などない。
男子トイレの住人、という言葉。スウ先輩のわずかに声をひそめた様子。そしてこの状況。すべてを鑑みれば、先輩がだれに頼まれたのかは明白だった。
ずばり、第一校舎一階階段裏の男子トイレに出る幽霊に、だ。住人というからには地縛霊かもしれない。
「また、ですか。性懲りもなく」
わたしの呆れ混じりの声にスウ先輩は笑ってみせた。ほんとうに性懲りもなく、だ。少しも懲りない、このひとは。
スウ先輩はいつもそうだ。なんの義理も利益もないくせに、既に死した人間の事情に首をつっこむ。その結果待つものはわかりきっているというのに。
先輩から話を聞いたわたしは、思わず渋面をつくった。

男子トイレに住む十数年前に亡くなったその生徒は、恋をしたという。あろうことか、いまこの世を生きる高校一年生の女子生徒に。彼女は隣の女子トイレに、友人と共によくやって来ていた。友人との会話に垣間見える彼女の人柄に、幽霊の身分で好意を持ってしまった。しかし自分は幽霊だから彼女に話しかけることも触れることもできない。
そこでスウ先輩の登場だ。
男子トイレの彼は言ったそうだ。せめてなにか贈り物がしたい。彼女は最近鞄につけていた大切なキーホルダーを落としたそうだか

ら是非とも同じものを。と。
彼は彼で情報収集と推理を懸命に行ったという。その結果、彼女が失くしたキーホルダーの特徴が明らかになった。それを頼りにスウ先輩がこうして雑貨屋に来たわけだが。
「なかなかうまくいかなくてな」
……先輩、なんであなたは……いや、もういい。これ以上呆れた言葉を重ねても同じことだ。
幾度目かのため息。先輩から特徴とやらを聞き出す。
聞いて、すぐぴんときた。今、女子高生の間でひそかに話題になっているキーホルダーがたしかにある。そのことを先輩に伝えようと口を開きかけて、
「……」
そのまま口が固まった。
ふいに、悪い予感の石が胃に落ちた。予感がわたしの思考をみちびく。
出した結論に先輩への呆れが吹き飛んだ。
ああやはり、と思う。
やはり、既に死した人間に関わった結果待つものは、途方もない無力感と悲しみだけなのだ。
いや、死者が生者に恋をしたと聞いた時点でわかりきっていたことではあるけれど――。
「先輩、相手の子に彼氏がいること、その住人さんは知ってるんですか」
先輩の顔が固まる。それからだんだんと眉尻が下がった。コマ送りの映像を見ているみたいにゆっくりと。
三白眼は相変わらずだけれど、その顔は今にも泣き出しそうに見えた。それがすべてを物語っていた。
ほら、ろくなことがないでしょう。悲しいだけでしょう。そんな心中語を吐き出すわたしの心は、呆れではなく虚しさで埋めつくされていた。

すぐそばにあった、ペアのうさぎのキーホルダーを指し示す。
女子高生の間で流行しているのは、『恋人とおそろいで』持つと永遠に結ばれるというキーホルダー。
――きっと、恋が成就する可能性が一分もないことは、本人にだってわかっていた。けれど、その可能性が倍になったら。見えないところから新たに一発殴りつけられたら。
無傷ではすまない。

先輩はもう一度話をする、と言った。トイレの住人の想い人に恋人がいることも伝えて、そのうえでどうするか聞いてみると。それが責任で誠意だと。
うまくいくかもしれないなんて言わないし言うそぶりさえ見せなかった。
止めるとも、言わなかった。
わたしは言えなかっただけ。
スウ先輩は言わなかった。それが、彼の思いを受け止めるということだった。

どれだけのあずかりものを、スウ先輩はしてきたのだろう。彼の預けたものはキーホルダーひとつだけれど先輩はその裏にあるものまであずかって、多分あずかりっぱなしにして。
そんな荷厄介なあずかりものを、いったい、いくつ。
ほんとうにばかだ、と思った。そんな面倒くさくて悲しいことを抱えこむなんて。
スウ先輩は、ほんとうに、ばかだ。優しくてお人よしでどうしようもなくいい人で、ばかだ。

後日、先輩が教えてくれた。結局、キーホルダーを渡してきたそうだ。それが彼女の幸せにつながるなら、と住人が望んだから。

スウ先輩の目が赤くはれていたけれど、言わないでおいた。

１０．近くの体温

雨に奪われた体温を取り戻す方法。

梅雨に入った。だから、近頃は雨続きだ。

放課後、傘片手に昇降口に立つと、景色は幾筋もの雨の線の向こうに白くかすんでいた。時折風が吹き、雨の中に残像を残して消える。そのたびにざっ、と切るような音がした。ひどい雨だ。傘を持っているとはいえ、身を晒すのがためらわれる。

それでなんとなく立ちすくんでいたら、隣に煙くんがやって来た。

煙くんも下校するところのようだった。傘を差そうと手が上がっていたけれど、私に気づいてゆっくり下ろした。ぺこり、と小さな会釈。

「なんだか、久しぶりだね」

「……雨で屋上には上がれないから」

「だね、そういうことだ」

私たちが三人でいつも集まっている別館屋上は、もちろん、雨の日は使えない。

私たちが集まること。それは、雨が降った日の億劫さには勝らない。しいて挙げられるような必要性はそこにはない。

けれど、いざこうして顔を合わせると、そのまま別れてしまうのも名残惜しい。煙くんも、先輩の手前だからかもしれないけれど立ち去ろうとはしなかった。

ざぁ、と雨の音が、私と煙くんの間を走る。二人して、言葉を忘れたオウムみたいに見つめあう。

そこに。

「お前ら、なにしてんだ？」

奇遇なことに、スウ先輩までやって来た。

三人がそろうのは久しぶりだから、とスウ先輩は前置きして、私たちをドーナツのチェーン店に引っ張った。
「おごってくれるんですか？」
「あー、俺から誘っといてあれだけど、今月は」
「……金欠ですか？」
私が聞いて、先輩が答えて、煙くんがぼそっと引き継いだ。そんなこんなで、着席。
店は足元の悪い中だというのに混みあっていて、私たちは肩を寄せ合うようにして座った。いつもだだっ広い屋上で集まっているせいもあるかもしれないけれど、少し居心地の悪ささえ感じてしまう近さだ。雨で冷えた頬を、二人の体温が浸食してくるような心地さえする。
こんないかにも仲良し高校生三人組がするみたいなことを私たちがしているなんて、不思議だ。私たちは、ただ同じようなものを見るというだけの接点しかないばらばらの三人なのだ。三人組、というより一人と一人と一人。その関係は仲良し高校生とか、放課後に寄り道とかいう言葉からはあまりに遠い。
「こうじめっと暗いと、よく出るんだよな」
けれどその接点は、しぶとく強固だった。スウ先輩の人柄もあるかもしれないけれど、切っても切れない縁がある。たとえばこうして、先輩の言葉に素直に頷いてしまう私と煙くん。それこそが、その証だ。
梅雨は空を雲が覆う。そうしてさえぎられた光があらわにするのは、いつもよりも数値を増した『故人口密度』だ。たとえば暗い廊下の隅なんかに、彼らは埃といっしょにたたずんでいたりする。
梅雨は、幽霊が多い。多分、盆の次くらいには。
「……梅雨は嫌いです」
煙くんが、女の子みたいに長いまつげを伏せ気味に言った。
「屋上に上がれないから？」
「それも、あります。それから」

煙くんは言葉を切る。彼のつぶらな瞳が先輩を見た。
「ああ、よく出るからか」
「はい。二重苦です……」
煙くんとは出会って間もないけれど、多分、彼は私たちの中でも一番敏感だった。もともと無口な子だから自分では言わないけれど、私たちが見えていないものまで見えているふしがある。だから愛する屋上にも上がれず、他人には見えないものにまで気をつかわなければならないこの時期は、苦痛なのだろう。
ほんのりと重苦しい空気が、三人で囲むテーブルの上にのしかかった。
その辛さは私にはわからない。雨は嫌いじゃないし――降り続くとうんざりすることもあるけれど――それほど幽霊が見えることについて悩んだことはないのだ。
だれも他人が見るすべてを知ることなどできない。どれだけ言葉で申告しあったって全ては伝わらない。私たちがお互い、「同じように」見えていると思っている幽霊の類だって、ほんとうはぜんぜん別物かもしれない。真の理解なんてありえない。
人は結局のところ、一人ぼっちだ。二人が集まったって三人が集まったって、一人と一人に、一人と一人と一人になるだけ。
だからこうして体温の距離が近づいていくことにも、さして意味などないかもしれない。

……けれど。
「これ食って元気出せ」
先輩が、残っていたドーナツを一つ、煙くんのお皿に載せた。半分にちぎるかどうか少し手を迷わせたけれど、結局まるまるひとつ。
私も笑って、便乗した。
「そうそう、ちゃんと食べて、栄養つけないとね」
私も手をつけていなかった一つをお皿に載せる。常々、煙くんは細っこくて駄目だと思っていたところだった。いい機会だから、太

らせる。
煙くんのお皿が、ドーナツで埋まった。ドーナツよりも丸い目で、彼は皿を見下ろしている。
しばらくそうして眺めていた後、煙くんが顔を上げた。
「ありがとう、ございます」
煙くんはそれはそれは可愛らしい微笑を浮かべていた。それからその微笑に困った笑顔を混ぜ合わせて、
「でも、こんなに食べれないので……お返しします」
なんて、小首を傾げた。
先輩はほんの少しほっとした顔をして、私は内心舌打ちした。いい機会だと思ったのに。

そんなやりとりの間に、居心地の悪さは雨の中へ出て行ったようだった。

……けれど、の続き。
さして意味がなかったとしても、それでいい。無意味なものに意味を見出してこそ、とだれかが言っていたし、スウ先輩も煙くんも笑っているし、私だって笑っているのだから。
雨で冷えた頬を、手が届く場所にいる二人の体温が浸食し、温める。近くにある体温に、私はそんな意味を見出してみる。まだまだ抵抗はある、だがそれはそんなに悪くないことのように思えるのだ。

09．　青と白しかない

青写真のなかの水色に、思いを馳せたことがある。

いつもの屋上に吹く風は、少し冷たい。夏が終わりかけているのだ。今年の夏はあんなに熱かったのに、その熱の残滓は随分遠くに感じられる。半分がた雲に覆われてはいるものの、空は明るかった。白い雲は風のせいなのかいびつな形をしており、それが視界いっぱいに広がってまるで異形の怪物のように見えた。

「ちょっと気味悪いな」

スウ先輩が言う。隣に並んだ煙くんも頷いた。私もそうですね、と同意する。目に痛いくらいの青空を喰らうかのような白雲はどこか恐ろしかった。それでいて凄みがあって、見ていて飽きない魅力がある。だからこそこうして三人雁首そろえて眺めているのだ。

「そういえば」

そうしてぼうっと眺めていたら、突然先輩が煙くんを見た。

「お前、なんで高いところが好きなの？」

……そういえば、聞いたことなかったっけ。考えてみれば不思議な話だ。当たり前すぎて忘れていたのかもしれない。

冷たい風が私たちの間をぬって通り過ぎていった。

煙くんを見ると彼はうつむいていて、フェンス越しに眼下の景色を見下ろしていた。つられて見下ろすと眼下には運動場が広がり、運動部が活動している。生徒たちのかけ声が、かすかに昇ってくる。

煙くんの横顔には、かすかなためらいが見え隠れしていた。

スウ先輩も気づいたのだろう。気遣うように言う。

「別に話したくないならいいんだけどな」

けれど煙くんは、顔を上げてゆるゆると首を振った。

そして、言うことには。

「先輩たちは、見えなくなればいいと思ったことはありますか」

そんな言葉を皮切りに、煙くんは話した。
ぽつり、ぽつり、と雨だれが落ちるような調子で。

世界はあまりにも狭い。死者と生者が共に暮らすには面積が足りない。死者の人口は確実に増加し続けている、もっと成仏して欲しいのに右を見れば地縛霊、左を見れば浮遊霊。小さいものも大きいものも、濃く見えるものも薄く見えるものも、よってたかって自分の視界を埋める。

自分は幽霊という名の半透明のフィルターに覆われた世界しか知らなかった。

「そんな世界しか知らなかったから、それが当たり前だと思ってて。……みんな僕のことを変な奴だって言いました。僕のまわりには、霊感あるひとなんていなかったから、だれもわかるとは言わなかった」

そんなもの見えるはずない。幽霊なんているわけない。

まだ小さいから、嘘で気をひきたがる。もう大きいのに、そんな嘘をつくなんて。

そんな理解のない言葉ばかりが周囲を埋めつくす。視界も身も心も窮屈でやはり世界はあまりにも狭すぎると思った。

けれど自分には広い世界へ踏み出す勇気もなくて。

一生こんな場所で、閉塞感にさいなまれながら生きていくのかと、途方にくれた。

「でも、気づいたんです」

小学生のとき、理科の授業ではじめて屋上にのぼったとき。

ぽっかりとただそこにある、大きな大きな虚空にただ見とれた。

見えすぎる幽霊がさえぎるせいで、視界がずっと向こうまで通ることなど一度としてなかった。すかんと、なにもない——広い世界をはじめて見た。

道は前や後ろ、左右にあるばかりではなかった。

上にだってあったのだ。小学生の自分は足元ばかり見ていたせい

で、なかなか気づけなかったけれど。
「……逃げてるだけなのかもしれません。横には逃げ道がないから、上に求めただけの話で。でも」
でも、救われた。この広い視界を覚えておけば、狭い世界にもきっと耐えられる。見えるわけないとか、嘘つきだとか、決め付けばかりの言葉からも逃れられる気がした。
世界の広さを知り、見晴るかすことのできるこの場所は自分にとっての安息の地になった。
「それが、理由です」

煙くんはゆっくりと、それだけのことを語った。
もとより口下手な煙くんだから、それはずいぶん長くかかった。だが彼は途中でやめることをしなかったし、私たちも黙って聞いていた。
煙くんが話し終わって、わたしもスウ先輩も曖昧な相槌をうった。それきり、静寂が訪れる。運動部の声がこだまする。煙くんには、彼らさえもフィルターがかかって見えるのだろうか。わたしは煙くんほど幽霊を見るわけじゃない。だからわからない。
けれど。
見えるわけない、とか。嘘つき、だとか。
そういう決め付けの言葉が、鋭い刃になることくらいはわかる。あまり思い出したいことでもないが、わたしにだって経験はあるから。
刃のような言葉を発する人々が、黒か白かにものごとを分けたがるなら、わたしたちは言ってみれば灰色だということ。
……あるいは。
視界一杯に広がる、青と白の空から連想する。
あるいは、青写真。青い地に白い線で枠組みをつくるそれにたとえるならば、わたしたちは青でも白でもなく水色なのだ。
「どうして、決めつけたがるかな」

唇から、そんな言葉がこぼれていた。ふいに気づく。今わたしが感じているのは、まぎれもなく憤りだ、と。激しくはない。だが確かに身のうちに存在し、じりじりと照りつけるような、そんな痛みだ。

煙くんは聞いた。

見えなくなればいいと思ったことはあるか、と。

ないとは言わないし、言えない。たとえ見えることが不幸せばかり呼び寄せるのでなくても、見えなければいいと思う日はきっとこれからも訪れる。

それでもかつての煙くんと同じく、屋上にのぼって気づいたことがある。

青でも白でもなく、水色のわたしに与えられた安息の地。それはいま、この場。心配そうにわたしを覗き込む煙くんや、わたしと同じにすこし怒っているみたいな顔のスウ先輩のそば。ふたりが特別なにか言うのではなくても、わたしは勝手にこの場に「それでいいよ」という許しを感じているのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9465q/

ナグサアキラメルフェン

2011年11月13日22時13分発行